

研究概要報告書【音楽振興部門】

( 1/3 )

研究題目	コロナ禍における囃子の継承をめぐる困難と模索:滋賀県長浜市・長浜曳山祭囃子保存会の活動を事例として	報告書作成者	武田俊輔
研究従事者	武田俊輔		
研究目的	<p>2020 年以降のコロナ禍は、全国の祭礼や民俗芸能の継承に大きな危機をもたらした。特に笛や太鼓、鉦等で奏される囃子については、笛が発生するエアロゾルの問題もあり、祭礼や芸能を行う当日だけでなく日常的な稽古において活動が困難な状況に陥った。そうした中で本研究ではガイドラインの作成や地域社会における合意形成を通して 2021 年に祭礼の実施を可能とした長浜曳山祭とそこで囃子を担う保存会と各町内に注目し、その先進的な活動を通してコロナ禍における囃子、ひいては祭礼全体の継承の可能性について探求するものである。</p> <p>祭礼は多くの人手を要し、身体の近接と密集、共振をつくり出す。こうした祭礼においては参加者が一緒に飲食する機会が数多くある上、密な状態で民俗芸能を上演することで参加者の感染を引き起こす危険もある。そもそも屋内で行われる日常的な会議や練習といったルーティーンを継続することが困難となった状況では本番に向けて準備を進めることもできない。さらに大規模な祭礼は多くの観光客を引き寄せる観光資源でもあり、不特定多数の管理不可能な彼(女)らが数多くやって来て密集をつくりだす。それもまた地域社会にとってのリスクと考えられてしまう。</p> <p>かくして全国で中止された祭礼であるが、2021 年以降は各地で再開に向けた模索が続けられ、一部では規模を縮小して祭礼が開催されるようになった。例えば全国の山車を用いる祭礼団体が加盟する全国山鉦屋台保存連合会によって行われた、コロナ禍における祭礼の実施・中止状況に関する調査結果によれば、2020 年には日本を代表する規模の 37 の祭礼の全てが神事を除き中止されたものの、2021 年 5 月にはそのうち 13 は内容を変更して(例えば山車を飾って屋外に展示するにとどめるなど)実施、あるいは実施の検討段階にあった。さらに 2022 年になって 3 年ぶりに祭礼を再開する地域が各地で相次いでいる。</p> <p>そもそも長い目で見れば、こうした祭礼や行事はこれまでも何度も戦争や震災、疫病による危機に瀕し、またそれを乗り越えて現在に至ってきた。時には国家権力などに実施を左右されつつも、ひそかな実施や復活に向けて人々は様々な戦術(tactics)を駆使してきたのであり、またそれは今回の状況においても同様である。その意味ではコロナ禍を単に特別なものとみなすだけではなく、そうした長期的視点からこの状況を位置づける必要があるだろう。本研究ではこうした状況をふまえ、囃子を中心にコロナ禍が都市祭礼と町内社会にどのような困難を与え、またいかなる変容をもたらしているのか、またそうした状況にもかかわらず一部の地域コミュニティでは 2021 年の段階でいかに祭礼を行い、それが可能となったのはどのようにしてかを分析していく。</p>		

## 研究内容

長浜曳山祭は山組と呼ばれる近世以来の 12 の地縁組織によって、山車の上で行われる子ども歌舞伎がメインの祭礼であるが、それと共に山車を曳行する際や子ども歌舞伎の前後に奏される囃子が不可欠である。囃子は小中学生に担われており、毎週末に各山組の町家で、稽古が行われる。本研究ではこの囃子の継承を担う各山組、そして全ての山組の稽古を統括する長浜曳山祭囃子保存会が行ってきた、コロナ禍での継承活動に注目した。2020 年秋以降、長浜曳山祭囃子保存会は医療専門家との協議のもとでガイドラインを作成して日常的な稽古の実施にむけた可能性を探り、実際に一部山組での稽古の再開を可能とした。また 2021 年以降、小中学生の参加について長浜市内の各学校からの同意を得て、縮小開催での祭礼の実施を可能とし、2022 年も実施された。コロナ禍での祭礼・民俗芸能の全国的な中止が相次ぐ中、長浜曳山祭ではいかにしてこうした活動再開が可能となったのか。これについて感染対策を踏まえた稽古や祭礼の変容と共に、祭礼の実施についての山組内での、また行政や学校等も含めた地域社会における合意形成の過程についても分析を行った。

他の多くの都市祭礼と同様に長浜曳山祭は 2020 年、中止された。理由としては第一に、感染リスクを考えて三密を回避しようとしたときに、祭礼に向けての技能を継承するための稽古や寄合の実施、そしてそれにもなう身体・意識の同期・共振を行うことが困難と考えられたためである。シャギリは毎週末、各山組の町家で役者候補の男児たちを含め子どもたちを集めて練習が行われる。そこで子どもたち同士と一緒に演奏し、また休憩時間には共に遊ぶことを通じて近い関係を築くとともに、若衆たちと子どもたちとの間の信頼関係も生まれていく。加えてこれは若衆たちが毎週町家に集まり、時には酒席を共にする機会でもあって、若衆の団結を作るような寄合の場としても機能していた。コロナ禍はこのようにさまざまな形での身体・意識の同期・共振の場を奪うことになった。

コロナ禍における祭礼の実施を困難にしたもう一つの理由は、感染リスクの不安をめぐる担い手内部、そして担い手とそれ以外の住民との間の認識のズレや地域社会における感染者に対する偏見である。どれほど万全な感染対策をしてもリスクはゼロにならない。そうである以上、担い手同士であっても祭礼の実施に同意が得られるかどうかは、最終的には相互の納得や信頼にかかわる問題である。例えば狂言や囃子の稽古を通じてに特定の山組で役者が感染することになったとすれば、稽古さらに祭礼が中止になることは避けられない。万一そうなったとき、感染源とされた家や山組が地域社会全体から非難を受けることになりかねない。長浜の場合でも祭礼全体を司る総當番では「コロナは人を差別したり攻撃したりする材料になっている。それを祭りの山組の中で起こさせるわけにはいかない。犯人探しされないように組織としてどう守っていくのかということが問題で、もしそうしたことが起こるなら、祭り全体を中止した方がよい」とされていた。

祭礼の再開に向けた動きが生まれたのは 2020 年秋であった。全ての山組が参加してシャギリを継承するための団体である長浜曳山祭囃子保存会が、滋賀県健康医療福祉部の専門家との協議などを経て、換気や密の回避、消毒や検温等について定めた形での稽古のガイドラインを作成した。また 3 月下旬からの狂言の練習についてもガイドラインが作られ、各山組で稽古の実施が可能となった。ただし実際に再開した時期は山組によってズレがあり、2023 年春の時点でも全ての山組が再開できたわけではなかったことは注意を要する。

研究のポイント	<p>こうした再開が可能になった背景には何があったか。祭礼の再開において地域社会の当事者が滋賀県健康医療福祉部の専門家、および山組内における医療関係者が協力して、囃子を含む祭礼の再開に向けて、感染対策をふまえたガイドラインを作成したことは重要な意味があった。再開の結果もし感染者が発生したとしても、地域社会に蹴る差別や攻撃、匿名の非難も含めた責任を問う声が出ることは避けられないが、その責任を専門家に委ねて外部に転嫁することができたためである。</p> <p>そして祭礼の当日に子ども歌舞伎だけでなく囃子を担う子どもたちに公休を認めて、人的資源の動員を可能にする立場にある長浜市教育委員会と長浜小学校・中学校が果たした役割も重要である。山組が祭礼の開催を熱望しようともこれらが了承しなければ、囃子ひいては祭礼の実施は不可能であった。これらのアクターは 2020 年度に多くの学校行事が中止になる中で、地域社会におけるこうした行事がなくなることは望ましくないという判断のもと、公休を認める方針を示した。こうした決定ができた背景としては、山組の子どもたちが通う小中学校では日常的に曳山祭に関連した伝統文化教室が行われており、山組との間に 20 年にわたる緊密な協力関係があることが大きかった。</p>
研究結果	<p>囃子そのものの再開や実施については、上記の「研究のポイント」において論じたような、外部の医療専門家、さらに教育委員会や小中学校との間において強固に結ばれた社会関係資本が重要な役割を果たした。と共に、囃子の再開とその前提となる祭礼全体の再開については、山組の将来への継承に向けた視点と、行事の縮小や観客の減少といった変化に対す柔軟性が重要な意味を持っていた。祭礼の未来に向けた継承のためには、山組は中止するよりもむしろ可能な限り準備を行い、そのプロセスを記憶・記録することが大事だと考えていた。途中で中止になったとしてもそれは将来再びパンデミックが発生した際に活かされることになる。さらに祭礼の伝統の変容についても山組はそれを受け入れた。祭礼の戦時中での中止と変容の記録を鑑みれば、自分たちが伝統と考えてきたやり方は、戦争も疫病もなく、経済成長の時代ゆえに継続できたやり方にすぎず、戦前と比較して大きく変わっている。まして祭礼の 400 年の歴史からいえば、戦後の 70 年間のやり方はその一部に過ぎない。先人が危機に際して祭礼を変容させてきたのと同じように、コロナ禍という激震に際し、それに対応していくべきだというのである。自分たちが慣れ親しんだやり方を、より長い時間軸から相対化できる視点が、コロナ禍での継承を支えた。</p>
今後の課題	<p>とはいえ一部の山組では 2 年間あるいはそれ以上の期間にわたって継続的な形で囃子の練習が行えなかったことが、今後大きな問題となってくるであろう。シャギリは小学校入学前頃から子どもたちが最初に祭礼に参加する回路となっており、小学校高学年になると完全にその主力となる。しかしながらこの期間の中断の結果、そうした山組では祭礼当日の囃子は既に技能を習得している若衆や中高校生によって担われ、役者を除けば子どもたちの祭礼参加の機会自体が失われていた。このことは中長期的に見た場合にシャギリだけでなく、将来的に若衆に加わる若い世代の参加にも影響を及ぼす可能性があると思われる。こうした中長期的な課題についても今後、研究を継続していく必要があるだろう。</p>